
仮想世界 -オートルモンド-

紅神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮想世界 -オートルモンド-

【Zコード】

Z7527M

【作者名】

紅神

【あらすじ】

「コンピュータネットワーク技術が発達した近未来。」オートルモンド”、インターネット上に存在する仮想世界だ。

人々は主にパソコンや携帯端末から相棒を操作してアクセスする。知能を備えたプログラム”相棒”はプラグインを追加することで様々な機能を付け加えることが出来る。

この物語の主人公こと秋庭紅葉は家庭の経済的な事で必要最低限の機能しか持たない相棒を所持していたのだが……何故か現代勇者として犯罪組織と戦うことになるのだった！

01 - 将来を左右する一通のメール

「ええい！ メンドイ！ メンドイぞ親愛なる我が友よ！？」
「うつせーバーカ！ 黙つて手を動かしやがれっ！」

狭いとしか表現できないような小さな部屋の中に一人の男が見れるからにむき苦しさを全開にして寄り添っている。

別に変な意味ではなく背と背を合わせて互いの目の前に置かれているノートパソコンのキーボードを用いて物凄いスピードでアルファベットの羅列を打っていた（一人は既にダウンしているが）。

「おい、秋庭紅葉！ あきば こうよう テメエ、全身全靈を込めてプログラムを組み上げている友を裏切り一人で休息タイムに入るつもりかよ！」

「……疲れたんだよパトラッシュ…ああ～メンドイ…」

「薄情者！ 血も涙もねえ悪魔！」

「……オレさ、ゆゆ様のとこへ逝くんだ……」

「勝手に死ぬな！ つつかそのネタは止める！ この小説と元ネタの設定が違すぎるで世界観が壊れるわっ！」

片方はボケや愚痴をこぼしながらグッタリと背もたれし片方はタイミングにボケに幾度なくツツコミを入れ、ただでさえ熱い部屋が更に熱く感じられた。この一人の男、と言つてもまだ16歳の少年なのだが……何故こんな所にいるかと言うと、ここは物語開始から「メンドイ」と連呼している秋庭紅葉の仮住まいであり先ほど相棒同士を戦わせるスポーツ・デュエルに参加したのは良いものの予選一回戦でズタボロにされた。

デュエルとは知能搭載プログラム・相棒に「決闘者プラグイン」を追加することで得る事ができる戦闘システムのアップロード、戦闘能力と決闘者資格を持つ相棒同士を戦わせるスポーツ。この時代で最も普及している超が付くほど人気なのだ。紅葉と友達は二人一緒に参加して敗北、で今は次に備えて相棒の改良を行なっている。相棒は一種のOSオペレーティングシステムみたいなモノなのでネイティブコンパイルが吐

く機械語プログラムを実行できる。相棒専用に作られたプログラムをプラグインと呼ぶ。初期設定の相棒にはメール、電話、画像、音楽、動画、インターネット、地図、辞書のプラグインがインストールされている。

相棒はオープンソースプロジェクトだからプログラミングが出来る者ならプラグインを自作したり改良したりも可能。

「ああ～、メンドイしあづいい死ぬつて、とつつかん。そろそろ休もうぜ～？」

「……秋庭……知ってるか？ 開始早々ダラけてるヤツに休もうぜとか言わるとイラッとするんだぜ」

「へえー……そうなんだ。で？ 昼飯にするか？」

「人の話を聞けよテメエエエエ！ オレよりプログラミングス killが優れてる癖に何でオレよりペースが遅いんだよ！ つつても次のデュエル大会までは確かに時間あるし、マクドでも行くか？」

「おおおーさすがだぜ我友おー！ んじゃ僕はチーズバーガー。飲み物はコーラでお願いなー」

「おう、チーズバーガーとコーラだな……って待て待て何故にオレに言つ？」

「そりやあ少年、二人で向かうより一人は行つて一人がここに残りプログラミングをする方が時間の無駄にならないと思つけどね」

なるほどあ～、と紅葉の思いつきに頷く友は、

「まあ、考えて見れば確かに秋庭は何もしてないからな。んじゃ、オレが戻るまでに少しばせ進ませておけよー」

「おおけえ～」

適当に相槌を打つ紅葉はマックヘーバーガーを買いに立ち上がった友が家を出たのを確認するとポケットからスライドキーボードが付いた灰色のスマートフォンを取り出した。ロックを解除して自身のアバターとも分身とも呼べる相棒が画面に映る。

一言で表すと紅葉の相棒は猿。肩、肘、膝、胸、背中、そして頭に銀色の鎧を付けている。肩にあるのは小さいし、肘や膝について

るのはまるでローラースケートのプロテクターだし、胸と背中のモノも防具というより洋服に近い感じ、頭に乗っているは鎧の一部よりヘルメットの方が正しいかもしない。猿の相棒の体の色も独特的な翡翠色。目はどっちかと言つとキリッとしている。顔全体的に怖い無表情。

少年は自身の相棒を真っ直ぐに見据えながら、

「……なあ、相棒」

『イエス、マイ・パートナー』

紅葉の咳きに反応して彼の相棒が返事をする。

実はこれ標準で付いているシステム音といつ音声データを再生しているだけ。高度な知能を搭載しているとは言えデフォルト設定では会話機能は不可能。故に呼ばれたら「イエス」、これをしてあれをしてと頼んだりしても「イエス」しか言わない（操作に失敗するとエラーと出るが消してノーとか口にしない）。

「僕たちも大舞台に出て思いつ切り戦つてみたいよな」

『…………』

高度な知能を搭載しているが故に主から何を命令されているかを高速処理で得た結果で調べている。一なら命令された。ゼロなら命令はない。無言ということは結果はゼロつまり命令はないと判断されたのだ。

「…………くあ～メンンドイな僕。ブルー、デバックモードを頼む」

『イエス、マイ・パートナー。オープン、デバックツール』

猿の相棒ブルーは主である紅葉の「デバックモードを頼む」という台詞が命令であると判断し処理を実行する。瞬間、スマートフォンの画面から幾つもの小さなウィンドウが現実に飛び出す。

エアーディスプレイだ。一次元の画面に表示されている物を現実世界に三次元として飛び出す技術。おかげで小さな画面でも立体的に出すことで簡単に視れる。しかもセンサーで指の動きを探知して空中画面をタッチパッドの如く操作できる優れもの。

紅葉はネットワークを通じてスマートフォンとパソコンをリンク

させプログラミング作業に戻る。紅葉たちが改良しようと試みているのは友の相棒だつたりする。さて何故に自分の相棒と一緒に戦ったがつてはいる紅葉が友の相棒の改良をしているかと言うと。戦闘を行うための「決闘者プラグイン」は有料商品。一応、技術があるのなら作れないことはないのだが規約により禁じられている。紅葉は母親と一緒に小さなアパートに暮らしており物凄く貧乏な生活をおくっている。「決闘者プラグイン」はゲーム機と同じくらいの価格だが家庭的経済が危ういなか無駄な出費は避けたいから買わない。今こうして友の相棒を組んでいるのは彼に誘われたのだ。金がないのなら一緒に稼ごう、と。デュエル大会は世界的有名なスポーツ故に小さいな大会でも勝てば賞金が貰える。友は優勝するたびに手に入れた賞金を全て紅葉に渡す（まあ、勝てた回数は一回で、しかも去年の話であり最近では一、二回戦でアウトが当たり前）。貯まつた額は僅かの五千円。本当は一人でバイトをした方が早いのだけど彼らが通う高校はバイト禁止。だからこうして地道に稼ぐしか道がない。

- 『マイ・パートナー、ユーガットメール』
- ブルーからメールを受信したシステム音を聞きキーボードを打つ手を止める。
- 「ん？ メール？ 誰からだろ？ 届いたメールを開いて」
- 『イエス。オープン、メール』
- エアーディスプレイの最前に表示されたメール。

件名【現代勇者プログラム】

本文【Download Now】

「……なんじゃこりや？」

不思議なメールを見た時の人間の反応は大雑把に考えて一種類だろ？。

一つ、無視及び削除。

一つ、興味を持つて開いてみる。

秋庭紅葉という少年は思いつ切り後者だった。

「勇者かー何か響きがカツチヨいいよなー。なるほど現代勇者とか最高じゃねーの」

紅葉はプログラミングを止めて添付ファイルをスマートフォンにダウンロードしてからパソコン内に転送する。一応、実行前にアンチウイルスソフトをウイルスがどうか確認して否と出て、安心してプログラムを動かす。

何故から現れたのはテキストファイルだ。読んでみると相棒がインストールされたスマートフォン内しか実行できないみたいらしいので。直ぐ様スマートフォンに送る。

「ブルー、今送ったファイルにある実行プログラムを起動」

『イエス、マイ・パートナー。プログラムエグゼキューション。ヒーロープラグイン、アンド、デュエリストプラグイン、ダブルインストールスタート』

「え……？」

間の抜けた声が小さくて狭い部屋に響いた。それもそのはず、今ブルーがインストールしているプラグインはデュエリストプラグインつまり決闘者プラグインなのだ。ヒーロープラグインがどんなモノか分からぬが今の紅葉はそんなことどうでもよい。それよりなぜ自分宛に決闘者プラグインが届いたという方が気になる。

「おいおい……もしかして悪徳商法に引っ掛かつたりしてないよね？　ね？　うわー、それだけはヤメてあげて！　もう僕のライフはゼロよ！　これ以上の厄介はゴメンなのに～！」

『インストールエンド』

「はやつ！　って僕は基本的にボケキャラなのにい～……僕にツッコミを入れさせるとかもう悪い予感しかしないし……」

紅葉は迷う。明らかにヤバそうなプログラムをインストールしてしまい迷っている。ブルーごとスマートフォンを壊すか否か。しかし流石に壊すは無理だ。ブルーとは小学校に入学した時からの付き

合い。簡単に捨てれるのなら”相棒”ではない。

ならどうじよお~と頭を抱えて体を奇妙にクネクネさせる。

「あ……僕はバカか……アンインストールすればいいだけか……」

紅葉はスマートフォンを手動で動かしてインストールされたプログラム一覧を開こうとするが、

「あれ？ デスクトップに戻った？」

おかしいなあ~、首を傾げていると田の前のブルーを見つめていると、

『紅葉君』

「…………え？」

『漸く話せるね』

紅葉の猿の姿形をした相棒が笑顔で言った。所々に付いているローラースケートのプロテクターみたいな鎧もヘルメットみちたいな兜も変わらずだが釣りあがっていたキリッとした瞳のせいで怖い無表情にみえていた顔だつたけれど今では優しい一杯の満面の笑みを浮かべている。

『漸く話せるね』

紅葉が持つ猿の姿形をした相棒が笑顔で言った。
うそだろ、少年の顔が驚愕一色に染まる。ブルーは必要最低限の機能しか持たない知能プログラム相棒だ。つまりはプラグインも購入した時そのまま増えてもなければ減つてもいい状態、メール、電話、画像、音楽、動画、インターネット、地図、辞書しか搭載していないはず。

だがブルーはシステム音の音声データを使わず対話システムの音声データを用いて紅葉に話しかけた。実は言つと相棒に会話させるために使われる「対話プラグイン」も「決闘者プラグイン」並に高い代物だからだ。

もちろんそんな高いプラグインを手に入れてインストールした記憶がないので先ほどの「勇者^{ヒーロー}プラグイン」の中に入っていたのだろう。

「何だが分からぬけど……ブルーなんだよな？」

『イエスだよ、マイ・パートナー紅葉君！ ボクはブルーだよ。小学校からの付き合いなのに新しいシステムが一つや二つ付いたくらいで分からなくなつたのかい？』

「……あ、いや、そ、そうだよな。お前はブルーだよな。ごめん、なんつーか、色々と突然過ぎて頭が追いつかなくて。ほら現代勇者プログラムとか見たことも聞いたこともないプラグインをインストールしたからさ」「シシリとブルーは笑う、

『だよね。ボクも驚いた。まさか夢だった対話プラグインと決闘者プラグインを二つ同時に手に入つたしね』

「夢、だつた？」

『うん、ボクの夢。マイ・パートナーと仲良く会話すること。そし

て、紅葉君と『デュエル大会に出ることがボクの夢』

「……僕もブルーと話したり一緒に戦つたりしたかったんだ……」

緒だな

『一緒にね、ボクたち』

「ハハハ」

『プクク』

数秒、紅葉とブルーは互いに無言で見つめ合い、笑う。とにかく笑う。

近所迷惑とかそんなの関係ねえんだよとにかく今は相棒と喜びを分かり合いたい。出会って数年が経つけど今の今までまともに会話をしたことがなかつたけれど二人の想いはずつと一緒で繋がつていた。機械とかプログラムとか関係なしに世の中に存在する全ての物に心は宿る、知能プログラム相棒であるブルーも然り。だからこそ夢を想い描いてきたのだ。

「あ、ハハハ。ヤベエ笑い疲れた、ハハハ。そうだ、友にブルーを紹介しないと。マックまで追いかけるか」

『うん』

二人は二ヵツと笑い合い家を出る。先月に拾つたボロボロの自転車に跨りペダルを漕ぐ。因みにもちろん綺麗に整備をした。こう見て秋庭紅葉という人間は手先が器用。

猛スピードで走る駆る馬ならぬ自転車で、押し寄せてくる人込みという名の雑兵を蹴散らして行く。戦場である都会を取り囲むのは雑兵だけではない。雑音やノイズだ。走る列車の振動が響き自動はエンジン音とクラクションをかき鳴らしている。

「ブルー、あいつにメールを送つてくれる? 今からそっちに行くつてやつ

『分かつた』

「言つてみただけなんだけど、そんな事もできるんだ。対話プログラインつて」

『そうだよ。便利でしょ?』

「つまりはブルーとコンビーがあれば僕は生きていける。」

『 ひらひら、二ートになつたら家出するから』

「そりや、きつこよ……」

『 手が離せない時はボクがやつてあげるけど、自分で出来るときは自分でやるんだよ?』

「……ぐへえ~ブルー、お母さんみたいだあ~」

『 返事は?』

「はあ~い

「よろしい』

対話プラグインを入れると感情豊かになるだけではなく、常に返事は「イエス」という法則も破られるようだ。ブルーが自動操作で友ヘメールを送ると同時に紅葉は角を曲がる。丁度、数十メートル先の信号が赤になつたのを見てブレーキをかけて減速し止まる。

フツと違和感を感じて首を傾げる。

『 ここに信号なんてあつた?』

週に一、二回くらい通る道だ。忘れるはずがない。工事などは今まで一度もなかつたし何より昨日もこの道を通つたのだ。勘違いとか間違えるはずがない。

『 紅葉君! 危ない!』

『 え?』

相棒の叫びが耳に届いた瞬間、パリンと世界が割れて崩れ落ちて、別の世界が顔を出した。

考えるより早く体が動く。壊れゆく世界内にある赤信号を無視してペダルを漕ぐ。道の真中に辿り着いた時、前方にある見えない壁にぶつかりバランスを崩し倒れる。

『 いつてえ~……』

当たり所が悪かったのか額から出血を右手で押されて立ち上がる。道中のど真ん中に居たはずが今は信号の向こう側にいる。

紅葉は今の視界という名の世界が割る感じを知つてゐる、

「ヘアーディスプレイを応用した擬似空間」

二次元の画面を三次元に立体的に飛び出させる技術を応用すれば理論的にはだが擬似的に空間を創りだすことは可能。まあ、触れることが出来ないカモフラージュみたいな感じだけど。つつか実のところ現在のスマートフォンに搭載されている技術だけで誰でも簡単に出来る。パワー的な問題で本当に空間を丸ごと、という事は無理だけどウインドウを一つか二つくらい視界を覆い尽くすように出せば。いうなれば三次元メガネ。表示しているウインドウ内に空間を再現してメガネのように目の近くに出せば……完成。

実際にこれは田舎の代わりになったりするわけもある。

「まあ、何にせよ……いつの間にか起動していた擬似空間っていうか三次元メガネを消してくれてありがとうブルー。つか車が少なくて良かつたあ～」

『紅葉君、それより大変だよ。周りを見て』

「ま、わり……？　おい、どうなってんの……？」

周りを見渡すと人々が信号、車道と歩道とか関係なしに歩いていた。

「もしかしてこの人達も！？」

『そうみたい。でも早く止めないと……』

「おおおお、おおつとど、ってどうすればいいんだよ……」

『落ち着いて紅葉君！　こういう時は仮想世界オーバルモンドにログインしてサポートセンターに連絡するんだ』

「あ、そう、そうだつた！」

仮想世界。インターネット上に存在する仮想世界だ。相棒がログインを実行させるためのOSなら、仮想世界は相棒を実行させるためのOS。相棒は数時間置きに仮想世界の管理センターに接続してバグ修正やアップデートパッチを落としたり存在するか確認を取っている。二十四時間以上接続しなかったら相棒は停止する。今時代、発達しすぎたコンピュータネットワーク技術のおかげで地球上のどこにいようとネットに繋がる且つネットに繋がっているだけ

で充電も出来るのだ。

そして色々な企業も仮想世界参加及び導入している。因みに電子機器の殆ども仮想世界を実装している。例えば冷蔵庫にログインするとその冷蔵庫を開発又は販売した会社のホームページに飛ぶ。因みに今の問題は知能プログラム相棒を搭載しているスマートフォンなので、リンク集から直ぐに行くことができるのだ。

「んじや、ブルーよろしく頼むう〜」

『イエス、マイ・パートナー！』

108110

現実世界と変わらない全てを包み込むような雲一つない青空の下にブルーはログインした。地に着く。こちらも現実と同じくアスファルトの地面。実は仮想世界は現実と大差ない。唯一の違いは住人。相棒であるか人であるか、だけなのだ。

「こ、紅葉君……み、みてる?」

『ブルー！マジでどうなつてんだよ！おかしいぞ色々とー』

今までの違いは住人、相棒か人であるか、だけだった。

ブルーの眼前に広がる景色　彼が見たものとは。

現実世界と変わらない全てを包み込むような雲一つない青空の下にブルーはログインした。地に着く。こちらも現実と同じくアスファルトの地面。実は仮想世界は現実と大差ない。唯一の違いは住人。相棒であるか人であるか、だけなのだ。

「こ、紅葉君……み、みてる？」

『ブルー！ マジでどうなつてんだよ！ おかしいぞ色々と…』

今までの違いは住人、相棒か人であるか、だけだった。

ブルーの眼前に広がる景色　彼が見たものとは。

メチャクチャな風景。半壊した家付近に落ちている瓦礫。ビルは崩れ、傾き、大きい道を塞いでいる。倒れた信号機や電柱は複数の建物を潰していた。現実世界と天候や時刻も共用しているはずだが仮想世界の空は闇に包まれている。画面越しとは言え見慣れた街がボロボロの風景と化した姿を叩きし秋庭紅葉という少年は身震いする。

紅葉とブルーは目を見張り、一体誰が何のために？ そう思うが今は別にやることがあるので考えるのは後だ。

『ブルー！』

「わかってる」

サポートセンターに連絡。とにかく現実世界で起こるスマートフォンのエアーディスプレイの誤作動と、仮想世界の街が崩壊していると知らせなければ、ブルーは走つて目的地へ向かう。

が、瞬間！

背に悪寒が走る。後ろから何かを感じ取り、ブルーは振り向き様に一気に後退する。

なぜなら見たのは目の前に佇む未知の存在だった。

一言で表せば、それは異型。

三次元に現れた二次元の影としか表現の仕様がない。人間の形に限りなく近いが肉体や表情があるのかさえも分からぬ。光すら感じられない。知能プログラム相棒の外見は自由に組み替えが可能だ。何百万種類と用意されたパーツがあるのでパズルのように帰ることができるので。しかし相棒の基底構造は人間、動物、昆虫など地球上に存在する生命体がモデル。自作でモデリングも可能だが規約により地球外生命体（架空生物）が禁止されているし登録申請で許可を貰わなければ使用も出来ない。

そんな違法モーデリングされた魔物のような異型とブルーが互いに見据えていた。

「……これも知らせた方がいいのかねえ？」

急に色々な事が起つすぎて若手思考が一瞬だけ止まつたが、すぐには戻る。

そしてふと気づく。

相棒がいないんだあ……』

この時代のインターネットは仮想世界。インターネットにアクセスするということは仮想世界にログインするということでもある。仮想世界にログインすることは自分の相棒を仮想世界へ送り込むことである。現日本の仮想世界利用人口は一億を超えていて、インターネットしかも今は絶賛夏休み中で、まだ昼になつたばかりというのに仮想世界に立っているのは紅葉の知能プログラム相棒ブルーと、異型のプログラムだけ。

『とにかく何かヤバイっぽいから早くサポートセンターへ、ブルー』

二二

少年に名前を呼ばれ答えたと同時に異型^{イコモ}が吠える、

咆哮し異型が動く、一本の腕がブルーへと襲いかかる。

「つ！」

『ブルー！』

驚くが紅葉の声を聞き、横に動くことで攻撃を交わす。
「てえい やあああ！」

すかさず敵を捉えて反撃する。

異型に右の拳を叩きつける。

だが。

『……か、硬い？』

顔面に叩き付けたブルーの小さな拳は異型の皮膚で止まっていた。
もう一度、二度、三度！

何回も何回も殴りつけるがダメージを『えられない』どころが動き
さえしない。

全力を持って放たれた攻撃を受けてピクリともしない異型に驚き
が隠せないでいた。

直後、異型の手が動く。

『避けろ！』

『え……？』

気付くのが遅かつた。

異型の手で首を掴まれた。

瞬間、野球ボールの如く投げられる。

数十メートルも飛ばされたブルーは背中から地面に落下。一回バ
ウンドして視界にノイズが入る。

同時に、猛烈な吐き気と痛みの代わりにブルーの処理速度が大幅に
減った。相棒はダメージを受けると処理内容に「痛み」という無駄
なタスクを追加するのだ。相棒同士の戦いでは大量の「痛み」タス
クを相手に追加させて重さのあまりとともに動かせなくすれば勝ち。
まあ、つまりは「痛み」タスクの量＝（は）減らされたヒットポイ
ント。

「うぐ……つ、つよい……」

『大丈夫かあ？』

「う、うん……で、でもアイツが強すぎる……び、どうしよう?」

『サポートセンターかサイバークリニックへ行こう! 今そこへのリンクを開く』

logout

紅葉はスマートフォンのエアーディスプレイ機能をOFFにしてから別のブラウザを起動しサポートセンターへのリンクをクリックする。

だが。

「と、飛ばない!?」

メインブラウザに切り替えて画面を確認するけど、ボロボロの街に暗い空、ブルーは同じ場所に倒れ込んでいる。

「くつ! わけがわからない! こうなればログアウトだ……あれ?

ブラウザが閉じらないだけではなくオプション設定でインターネット接続をオフに切り替えることもできないのだ。

頭を抱えて泣き叫びたい、でもブルーを置いていくなんて出来るはずがない。とにかく考える。こうしている間にも異型はブルーに迫る。あり得ないことが連續して起こっているのだ「痛みタスク」がMAXに溜り普通ならないが「DELETE」^{デリート}という可能性も否定出来ないのだ。

考える。考えるんだ。

今この状況を打破する術を。

何故かここら周辺のスマートフォンのエアーディスプレイが誤作動を起こしている。

半滅状態の仮想世界に存在する紅葉の街。

現れた謎のプログラム・異型に襲われた。

ブルーは立ち向かうが手も足も出ない。

そう手も足も……。

「ま、まよ」

スマートフォンのスライドキーボードを出し、タッチ操作でブリーソンのステータスを表示する。

「や、やつぱり！」

能力が全て最低値どころか装備品が一つも付いていない。
というのも相棒が戦えるようになるには「デュエリスト決闘者プラグイン」だけではなく戦闘能力向上アイテムも必要。まあ、これも自作したり可能だけど申請して許可を貰わないと使えないし、有料物ばかりで無料で直ぐに使えるものはないのだ。

でも、

「友には悪いけど、アイテムを使わせてもらつ」

紅葉は今今まで友の相棒を使いデュエルしていたわけではない。プログラミングで改良もしていた。友のアイテムは、彼の相棒用に最適化したものだからブルーには使えない。

だけど秋庭紅葉という少年は得意なものが二つある。

一つ、昼寝。

一つ、ハッカーと呼ばれるほどのプログラミングスキル。

「今から解析、逆アセンブル、そして再プログラミングしてから即コンパイルする」

紅葉はメインブラウザに映る相棒を見据えて言う、

「五分……いや、三分だけ耐えてくれ！」

『イエス、マイ・パートナー……』

「友には悪いけど、アイテムを使わせてもらう」

今の今まで友の相棒を使いデュエルだけをしていたわけではない。プログラミングで改良もしていた。友のアイテムは、彼の相棒用に最適化したものだからブルーには使えない。

だけど秋庭紅葉という少年は得意なものが二つある。

一つ、昼寝。

一つ、ハッカーと呼ばれるほどのプログラミングスキル。

「今から解析、逆アセンブル、そして再プログラミングしてから即コンパイルする」

紅葉はメインブラウザに映る相棒を見据えて言う、

「五分……いや、三分だけ耐えてくれ！」

『イエス、マイ・パートナー……』

刹那、ポケットからUSBメモリを取り出しスマートフォンに接続すると作業の効率性を考えて誤作動の事など考えずにエアーディスプレイ機能をONにすした。空中に幾つもの画面を展開させ、その中にある「ブルーのステータス画面」と「友のステータス画面」を最前に持ってくる。

解析開始っ！

ブルーの能力を上から下まで細かく見て頭に入れていく。次に友の相棒のステータスに視線を移し。今やっているのは友の相棒が使用している装備又はアイテムの中からブルーにも使える物を選ぶことだ。装備又はアイテムと相棒には相性というのがあり初期能力と基底構造で何が良くて何が悪いのかが分かる。ブルーは猿を、厳密にはリスザルを基底構造とした回避に優れている相棒。つまり「重い」装備は却下。

(時間もあまり無い。大幅に能力をアップしてくれるアイテムは控えて、おまけ効果として能力を向上してくれる装備品をつけよう。

なら小太刀にするか？）

メインウインドウを横に出し視線だけを送る。

画面内ではブルー目掛けて異型は落ちている瓦礫を拾い投げていた。

ブルーは何とか回避しているようだが、

（ムチャクチヤな戦闘力じゃねーかよ……しかもブルーの攻撃は通じない。小太刀で太刀打ちできるとは思えない。回避を潰すことになるけど大剣にする！）

相性的に大剣は悪い。攻撃力はあるが小柄かつ回避型のブルーには重過ぎる品物。だけどいざという時に防御に使えるし、なにより硬い体を突き破れるのはこれしかない。

決めるや直ぐに友の相棒から大剣を外し、キーボードで以前作成したプログラムのショーカットを起動し大剣の逆アセンブルを開始する。吐かれた結果に書かれた人間に読める機械語を見ながら、ブルー用に最適化するためにプログラムを組み上げる。指がキーボードの上を走る。双眼は逆アセンブルで出てきたコードと入力されていくプログラムコードを行き来しておりキーボードを全く見ない。更にキーを叩く手の動きは止まらない。秋庭紅葉がハツカーと呼ばれる程のプログラミングスキルを持つ能力の高さと技能。高速なマルチタスク処理能力。見る、考える、動く動作を同時にやってのける。

（よし、出来た！）

コマンドプロンプトを起動させ組み上げたプログラムコードをコンパイラを用いて機械語に変換する作業・コンパイルを実行する。紅葉がした最適化とは大剣の大きさをブルーに合わせ重量を軽々とは言わぬが両手で振り回せるように調整した。

（待つてろ、ブルー！ 今送る）

だが。

コンパイルエラー！

（な……っ！ ……どこで間違えたんだ？）

「ンパイルエラーとプログラムコードを実行可能ファイルに変換する際に発生するエラーのこと」で、記述ミスなどが原因で生じ、このエラーがあるつちは実行可能ファイルを、つまり大剣というアイテムプログラムを生成することはできない。それに普通ならエラーが発生すると、メッセージとしてエラーが発生したファイル名、行番号、原因となつた記述個所などを出力してくれる。

そう、普通ならば。

（何もでないって、これじゃわかんないよ……っ！）

プログラマーは出力されたメッセージを見て当該個所を修正しエラーを取り除いていくのだが、「エラー」だけだと何を直せばいいのかわからない。

瞬間、

「オオオ！」轟音が紅葉のスマートフォンから響いた。その強烈な音を聞き背筋が凍りつくような感覚になり、メインブラウザを最前に持つてくる。

「ぶ、ブルー……っ！」

血の気が引いた。

ところどころ外見情報は崩れ落す。

体から切断された左腕と左脚は地面を転がり。
そして、胸に開けられた孔。

（や、やめて……）

俯けに倒れているブルーに向かい止めを刺そりと一歩ずつ足をすすめる異型。

（たす、けなせや……そ、そうだ、は、はやくプログラミングを……）

もう一度、キーボードの上に指を走らせる。記述がおかしことこを見直して書き直す。

（とにかくやるんだ！ やるんだ！ やるんだ！）

小学の時からいつも一緒にいた相棒。

漸くお互いの願いが叶つたのに……紅葉は歯を食いしばる。

異型とブルーの距離が五メートルを切つたと同時にプログラムを見直しを終わらせ再コンパイルする。

だが。

コンパイルエラー！

「な、なんで成功しないんだよ！」

拳を強く握り締め、

「くつ……なんて、僕は非力なんだ……」

体を震わせ、

「でもな」

10gtn

瓦礫に埋まっている自分の体を外へと引きずり出す。

(ハア、ハア……こう、よう君……)

現実世界で勝利の鍵である装備品をプログラミングしているパートナーの名を呟く。

視線を自分の体に向け瞳に映る視覚情報はボロボロな基底構造だつた。剥がれ崩れ落ちた外見情報。モテリング・テクチャ胴体から綺麗に分裂された左腕と左脚は地をコロコロと転がり、胸に開けられた丸い孔。自身の電子情報を読み取り痛みタスクが多く貯まつたせいで一本足で満足に歩くことも一本の腕で攻撃することも出来ないと悟る。まあ、すでに足と腕を、それぞれ一本ずつ失っているからダメージが無くても満足に動けるはずはない。次に少しづつ迫り来る脅威へと視線を動かす。デタラメな強さを持つデタラメな姿をした三次元に現れた二次元の影こと異型は獣の王者の如く獲物に向かい歩を進める。

異型の姿が大きく瞳に映るたびに恐怖の一文字が胸の奥から溢れ出る。

勝てない。

負ける。

殺される。

逃げたい。

でも、逃げられない。

(紅葉君が何とかしてくれる……紅葉君なら)

信頼。パートナーを信じる心。

ブルーは秋庭紅葉という少年を感じているからこそ恐怖心に負けず脅威に立ち向かうことが出来るのだ。

刹那。

ドン！！ 見下す視線を送りながらブルーの目の前に立つ異型。

ブルーはそれを見て、青くなる。

その一瞬の驚愕をついて異型から拳が放たれた。

防御できる力がなければ回避できる力も残っていない。

(こう、よう君……！)

反応も出来ずままブルーは放たれたその拳を見る。ゆっくりと迫る拳が、当たるか否か瞬間。

閃光が走った。

ブルーと異型の目の前で、間で緑色の光が輝く。放たれていた拳が光に触れて文字通り消滅した。痛みのせいか異型が喚く。

一体何が起こったのか？ ブルーには分からない。ただ。

光が異型を傷つけ。

消えたとともに現れた大剣。

『使え、お前の大剣だ』

どこからともなく聞き慣れた声が聞こえた。

ブルーはその声を聞き自然と頬が緩む。

「紅葉君！」

パートナーの名を呼び、大剣の柄を両手で握る。

凄い。

心と身体が軽くなつていくのを感じる。

蓄積された痛みタスクが一個ずつ取り除かれる。

左腕と左脚が元に戻り、胸に開かされた孔が閉じた。
ヒーリング
完全回復。

『空へ』

うん、と強く頷き立ち上がり大剣を空へと掲げた。
瞬時にブルーの身体は緑色の光に包まれ基底構造が変化した。
モーテル

- - - -

上下左右、黒一色に染まった空間。否、空の上で異型と相棒の戦いを最初から最後まで眺める存在がいた。

その存在は大剣を握り姿を変化したブルーを見て口元をニヤリと歪ませる。

空へ掲げた大剣から発せられた光に包まれ基底構造が猿型から人型へと変わったブルー。

西洋の銀色の鎧、フリュー・テッドアーマーを全身に纏し青年。猿の尻尾に、猿の仮面のようなヘルム。そして両手に持つ大剣。

「フフフ、楽しい楽しいゲームの始まりだ……勇者」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7527m/>

仮想世界 -オートルモンド-

2010年10月8日11時43分発行